

ビデオ観察とナラティブ分析の方法論

黒田 真由美・小林 信一・高橋 菜穂子

1. 目的と概要

近年のナラティブ・アプローチでは、人が「意味づける行為」を取り上げ、研究者も含めた人間についての研究が行われている。各当事者の出来事への意味づけだけでなく、研究者の同じ出来事への意味づけ、さらには、研究者が与える影響について分析がなされている。一つの出来事でも人によって捉え方が異なり、ナラティブを多角的に分析することによって、心理的リアリティに迫ることが可能となる。このようなナラティブ・アプローチの有効性は多くの研究の中で示されているにも関わらず、その分析方法を学ぶ機会はあまり設けられていない。そこで、ナラティブデータの解釈、特に、ビデオ観察によって収集したデータの分析方法について理解を深めるため、先行研究をもとに方法論をまとめ、さらに、メンバーが行っているナラティブ分析を見直し、質的研究における分析方法について理解を深めることを試みる。方法論に関する理解を深めること、研究者としてフィールドとの関わり方を見直すことが目的である。

コロキウムで行なった活動の概要について述べる。前期は文献研究、後期はデータセッションを中心に行い、また、質的心理学会に参加を通して、知見を深めた。文献研究では、分析方法についての基本的な知識を整理し、理解を深めた。そして、フィールドと関わり調査をする際に持つべき意識や注意点について整理し、また、データ分析の可能性や注意すべき点についても学んだ。データセッションでは、参加者がフィールドから得たナラティブデータを持ち寄り、文献研究をふまえ、その分析過程を共有した。質的心理学会は、心理学に限らず境界横断的なジャンルの研究に関する議論が活発に行われている場であり、質的データの分析について学ぶ場として適している。そこで、学会への参加も通して、データの分析方法についての学びを深めた。メンバーは、研究成果を学会で発表し、各自の研究に関して開かれた議論を行った。

2. 文献研究

「質的研究入門-〈人間の科学のための方法論〉-」に関し、個々人が関心を寄せる章について読書会を行った。本読書会は、質的研究とは何かという、当該文献についての概観あるいは質的研究全体の俯瞰から行われた。未知の現象にアプローチするとき、既成の理論に基づいたやり方には限界があり、また、研究とは客観的であるべきだということもその理想が崩れ始めたことに対し、質的研究の意義として、①研究対象に適した方法と理論の適切性、②当事者の視点とその多様性、③研究者による自己の研究に関する反省、④アプローチと方法の多様性に関する検討が行われた。限定的であっても何らかの方策を導き出すために生まれた質的研究の背景やそれが人と人との間のコミュニケーションを基軸とした分析により出発するという点が確認された。

この読書会においては、KJ法やGT法等の個別の方法の検討はもとより、質的なアプローチによる個別の研究を、いかにプロセスとして捉えるかの検討が行われた。当該文献によると、研究のプロセスとは直線性のものと循環性のものが存在する。それは理論を検証するのか仮説を生成するのかによって異なり、循環性の持つ強みとして、調査プロセス全体を常に振り返り、他の研究段階に配慮しながら特定の段階に取り組むこと、用いた方法、カテゴリー、理論はどれほど研究対象とデータに適しているのかという2点が挙げられている。直線的モデルにおいては数量化が目指されるが、循環的モデルにおいては収集されたデータとその解釈を循環的に行うという、質的研究の基礎的な部分が確認された。また、当該文献においては近年注目を集めているヴィジュアルナラティブに関しても触れられており、質的研究の分野での視覚データの再発見として、行為に関する言葉による報告を超え、行為を自然に生じるままに分析したいという研究者側の願望や、フィールドへの何らかの介入の必要なく実施できる形式の観察が利点となる時があること、参与や介入をしながらの観察、その結果の観察を通し知見が得られる可能性があるという4点が特徴として上げられている。しかしながらそもそも視覚データの収集は個別の研究により発展してきたものであり、様々な方法があり、何を基準とするかによって比較の対象は異なるとされる。当該文献においては、表によって視覚データ収集の比較がなされ、観察に関わる方法の選択肢の区別と位置づけが明確にされている。

実際の分析手順においては、コード化の手順とそれに対するシーケンス分析が検討された。コード化とは、個々のデータから理論を作ろうとするものであるが、ここではオープンコード化、軸足コード化、選択的コード化の3種が挙げられている。この分析方法においては、純粋なテキストレベルを超え、カテゴリーとその間の関連を練り上げて理論が形成されることが強調される。しかしながら逆に、分析の発話をカテゴリー化して配置しなおしたり、理論を作ったりしてゆくうちに、

徐々にテキストの全体としての形が見失われる傾向がある。このような場合、テキスト全体を見渡すというシーケンス分析が採用されるべきである。シーケンス分析として、会話分析、客観的解釈学、ナラティブ分析が挙げられている。両者は互いに矛盾するものではなく、全体を俯瞰しながら詳らかな理論を生成する必要性が検討された。

これまで、質的研究の個別な方法やその研究手法の背景が主だったものになっていたが、現実的に研究としてアウトプットするためには何らかの評価基準がなければならず、基準があるからこそ研究方法が基礎付けられるようになるのだと考えられる。アウトプットの段階においては、それがどれだけ理路整然と述べられていたとしても、基となるデータが都合の良いデータだけを選んで解釈をもっともらしく見せるというやり方は批判の第一の槍玉として挙げられる。質的研究の基礎付けと評価基準において重要なことは、どのような基準を用いて質的研究の手続きと結果とが適切に評価できるか、どの程度まで研究は一般化されるのか、また、どのように一般化が保証されるのかという点にある。ここでは、質的研究の評価基準として、信頼性や妥当性といった元来数量的研究において扱われてきた基準を応用すること、そして、各方法に適した評価基準を新たに作り出す必要性が挙げられる。従来の数量的研究において用いられてきた通時的あるいは共時的な信頼性や妥当性が質的研究にはそのまま用いることはできないことはしばしば言われることであるが、評価基準に関連して、質的研究の手続きと結果とをいかに書くか、アウトプットをいかに行っていくのかという問題に先行して、インタビュー状況の分析やコミュニケーションによる妥当性などが挙げられている点は、質的研究のための新しい規準を作ろうとする試みはいまだ試作段階であることが考えられる。

最後に、質的研究と量的研究は認識論と方法論等、様々な点で相違が認められるものの、互いに関連付けながら研究していくというトライアングレーションの立場も概観された。

3. 学会参加

2009年9月11日～13日まで、北海学園大学において行われた第6回日本質的心理学会に参加した。メンバー全員は個人研究発表を行い、大会企画のシンポジウムに参加した。

また、大会企画シンポジウムとして21世紀の知と智を拓く個別ナラティブの力-対話と融和-が行われた。本シンポジウムは、結城幸司氏を招き、彼の半生と現在を語って頂くという目的で行われた。結城氏のナラティブは重厚かつ多声的であり、筋の整った整合的な物語にはならなかったとの見方も出来る。シンポジウムは結城氏の講演に先行してアイヌアートプロジェクトによる舞や歌によって幕を開けた。

学会でこのような芸術に触れられるのは質的心理学会に独特なものであるのではないかと考えられる。その公演の後、結城氏の半生についてのインタビューが森先生をインタビュアーとして行われた。それは先述した直線モデルに類似したインタビューであり、まさに半生を年齢を追いながら聞くというものであった。結城氏へのインタビューが高校を出た後当たりになった頃、それまで沈黙を守っていたやまだ先生がインタビューを遮り、アイヌの言葉であるという「ウェペケレ」という言葉を使った瞬間、それまで事務的に語っていた結城氏の顔が変わり、質問に先行して自ら率先して語りだした。

シンポジウムの抄録に見られるように、生きている個別の人間を不可視にするのは、(しばしば社会・文化・集団から提供される)固定化した物語による個人のナラティブの回収によってである。無論我々は社会・文化のなかで個性化できるのだし、集団に帰属することで個人として成立している。これは否定できない。しかし回収したところで止めてしまったら、結城氏も我々も、ある社会的集団の一成員以上の意味を持たない、他と代替可能な存在となるだろう。個人の個別性は共同性からズレ続ける。

結城氏はアイヌ文化と深い関わりを持っているという語りは徐々に変化し、彼の個性化にアイヌ文化が果たす部分が徐々に少なくなっていった。しかし、社会的カテゴリーによって彼と我々を同質化したり、異質化したりすることが本シンポジウムの最終目的ではなかった。共同性に不可避的につきまとわれつつ、ズレながら、固定的な結論に至らない対話のなかで個として向き合い続ける。予期できないライブの語りに立ち会い、共同生成としての語りが生み出されたものと考えられる。

シンポジウムに参加するだけでなく、個々人が研究発表を行い、それぞれのデータ分析に関する知見を得た。黒田はフィールドワークによって得られたデータに基づき、子どもの英語発話の様子について分析し、発表した。子どもが英語活動の中で、自分なりの参加態度を示しながら学んでいる様子を分析し発表した。それに対して、子どもが理解する過程について検討するだけでなく、子どもの全く分からないという体験について検討すべきではないか、子どもの分からなさを子どもがすることにも意義があるのではないかというような異なる視点からの意見を頂いた。データを完全に共有することは出来ないためその意見の適切性には限界があるが、学会でデータ分析を基にした発表をすることで、その分析に関して異なる視点からの意見を頂いたり、質問を受けることにより、コロキウムとはまた異なる見解が得られた。

小林は2度にわたる配偶者との死別経験を有する男性の語りの系時的变化の分析の発表を行った。プロセスと構造を概念として提示することが目的であったが、具体的な分析過程を発表し、質問に応答する中で、協力いただいた方の揺らぎや

行きつ戻りつの意味づけの変化が提示し切れていないこと、それは概念の関連付が文章の提示にとらわれすぎているのではないか、モデルや図にして視覚的にわかりやすくすべきではないかという指摘を頂き、短時間で発表する際のわかりやすいアウトプットが必要であることのヒントを得た。

学会への参加は、語りが共同生成されるプロセスを学び、また、分析の可能性が拓かれるという点で、有益であった。

4. データ分析

本稿では、実際にコロキウムで行なわれたデータ分析について以下で見ていくことにする。ここでは、研究分担者である高橋のデータを取り上げ、分析について述べる。

(1) 分析の概要

本コロキウムでは、実際に現場で収集したデータを基に、参加者が共同で分析を行った。質的データの分析プロセスにおいては、しばしば研究プロセスの可視化の必要性が指摘されているが、本コロキウムでは、分析対象である語りデータと、その分析手続きのプロセスを参加者で共有することを通して、より透明度の高い分析を行うことを目指した。これにより、単独での分析よりも重層的な視点を確保し、単独では導き出せないような協働的かつ生成的な知へと、分析知見を発展させることが可能になった。

なお、データ分析では、コロキウム参加者の一人である高橋のインタビューデータを用いた。高橋は、児童養護施設の職員への半構造化インタビューを実施し、施設における支援実践のありようを検討している。ここで用いたデータは、修士論文作成のために収集したものである。

(2) 目的

児童養護における支援実践は、急速に複雑化する子どもとその家族の抱える問題に対して、有効な対応を早急に確立することを迫られてきた。そのため、現場の具体性や、日常における複雑な対人的機微を十全に理解し、そこで行われている支援実践のありようを把握するという課題が取り残されてきている。

Flick(2002/1995)は、従来、心理学や社会科学の研究成果が日常生活においてあまり生かされてこなかったという反省を踏まえ、ローカルな知に立脚し「当事者の視点とその多様性(Flick,2002/1995)」を組み込んだ質的研究の有効性を述べる。

本研究では、児童養護施設で子どもたちに支援実践を行っている職員の役割に着目し、児童養護施設における支援実践当事者の語りを質的に検討することを通

して、現場の支援のありようを明らかにすることを目的とする。

(3) コロキアム・データ分析プロセス

コロキアム・データ分析プロセスは以下の段階で行なわれた。

第一段階：プレ・インタビューの分析から〈基本枠組み〉構成までのプロセス。

第二段階：〈基本枠組み〉をもとにした、本インタビュー語りデータの分析プロセス。

前期のコロキアムでの分析は、おもに第一段階にあたり、プレ・インタビューで得た知見を検討し、それを基に先行研究のレビューを行い、〈基本枠組み〉を構成するまでを共同で行った。後期のコロキアムでは、第一段階で構成した〈基本枠組み〉に基づき、研究目的をより精緻化し、実際に現場で得た8名のインタビューデータの詳細な検討を行った。

以下では、第一段階、第二段階について具体的なプロセスを述べる。

(4) 第一段階

第一段階は、プレ・インタビューから施設の支援実践をとらえるカテゴリーを生成し、それを基に、本研究の下地となる〈基本枠組み〉を構成するまでのプロセスを指す。以下に具体的な手続きを述べる。

プレ・インタビュー協力者は、児童養護施設A園の主任のA先生であった。A先生は女性で、インタビュー実施時57歳、勤続年数は10年であった。

プレ・インタビュー分析は以下の手順で行なった。

①テキスト化作業：録音記録はやまだ(2007)のテキスト作成法を参考にし、3次テキストまで作成した。具体的なプロセスは、録音された内容を、文字記録に変換する1次テキスト化作業、1次テキストを読点で区切り、通し番号をつける2次テキスト化作業、2次テキストをカード化する3次テキスト化作業から成る。

②テキストの分析：分析は、「発想法(川喜多,1967)」を参考にし、3次テキストをラベリング、グループ化し、最終的に語りの意味連関を図式化した(図1)。

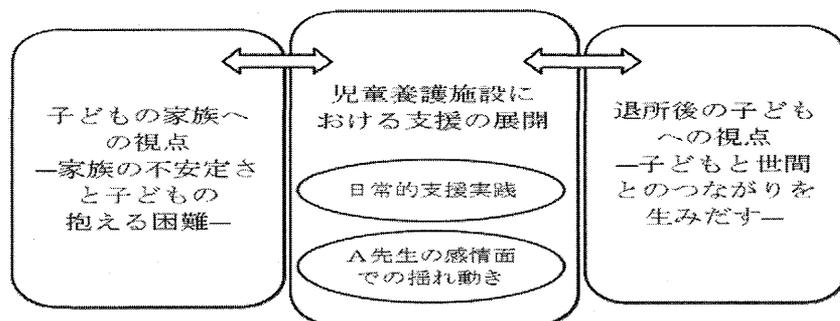


図1. プレ・インタビューKJ法図解

上記の図解によって明らかになった「他のシステムとのつながりを生み出す支援」という視点を基に、先行研究のさらなる検討を行い、その結果、谷口(2006)の<つながぎ援助>モデルを援用することとした。ここでは児童養護施設の子どもへの重要な支援基盤として、「家庭」、「児童相談所」、「学校」を組み込み、「子どもを取り巻くシステムとのつながりを視野に入れた児童養護施設の支援モデル」という<基本枠組み>を構成した(図2)。

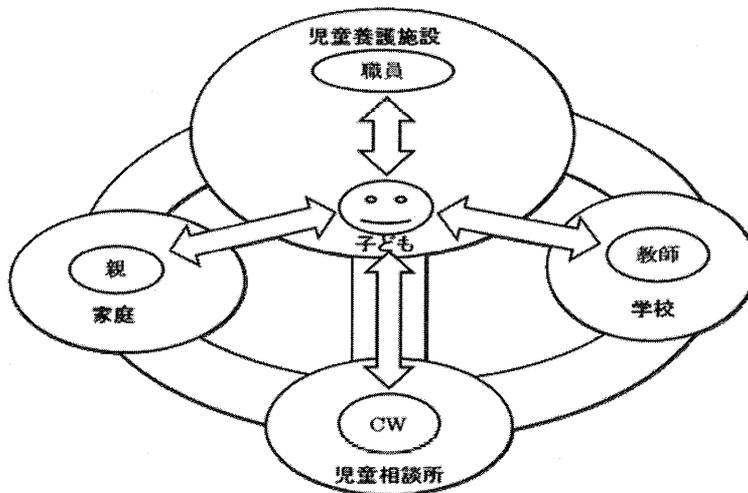


図2. 子どもを取り巻くシステムとのつながりを視野に入れた児童養護施設の支援モデル

第一段階では、次の様な成果が得られた。プレ・インタビューの図解は、2008年度に高橋が行ったものであるが、再度コロキアムの中で見直し、共同で分析したことにより、<他のシステムとのつながりを生み出す>という視点がより明らかな形で導き出された。さらに、<他のシステムとのつながりを生み出す>という視点を基に、先行研究のレビューを重ねた。ここでのコロキアムでの共同分析作業によって、曖昧であったリサーチクエスチョンが明確になり、より複合的な視点を組み込んだ精緻な研究デザインを構成することができた。

<基本枠組み>の構成段階では、いかにして分かりやすい枠組みを構成し、本インタビューにつなげるかという視点で、共同で意見を出し合うことにより、<基本枠組み>の修正・追加が多面的に行われた。

(5) 第二段階

第二段階では第一段階で構成した<基本枠組み>である「子どもを取り巻くシステムとのつながりを視野に入れた児童養護施設の支援モデル」を基に、研究デザインを構成し、本インタビューを実施した。さらに、本インタビューの語りデ

ータを検討することにより、＜基本枠組み＞を修正・追加し、より現場の現実性に迫る支援実践モデルを構成した。

本インタビューの目的は次のようなものである。プレ・インタビューで明らかになった施設の子育ての重要な特徴は、施設職員の視点が、子どもの入所期間だけでなく、子どもの入所以前の環境や、子どもが退所した後のことを見据えているという点である。退所後をも含み込んだ長期的パースペクティブにもとづき、そのつど、子どもに必要と考えられる支援を行っているという語りにもみられたように＜他のシステムとのつながりを生み出す＞という視点についてさらに検討し、児童養護施設における支援実践をとらえるための新たな視点を提示することを目指した。

第一段階で構成した＜基本枠組み＞を基に、子どもを取り巻くシステムとその成員をできるだけ単純化し提示し、子どもの生きる生態を簡潔に示しながら、その中で各システムが子どもに対しどのような支援を行っているのかという本研究の焦点を具体化し示すことを目指した。そして、各システムの一つの全体像を提示しながら、具体実践レベルでの対人的なかかわり合いが浮かび上がるモデルを構成することを目的とする。

本インタビュー協力者の概要は以下に記す。

名前	実施日	所属	役割（担当学年）	年齢	性別	勤続年
B 先生	2009 年 10 月	A 園	2009 年度～主任(担当なし)	61 歳	男性	2 年（以前一時保護所、障害者入所施設等に勤務）
C 先生	2009 年 5 月	B 園	園長（担当なし）	55 歳	男性	31 年
D 先生	2009 年 8 月	B 園	保育士（担当あり）	45 歳	女性	25 年
E 先生	2009 年 7 月	C 園	保育士（担当あり）	60 歳	女性	20 年
F 先生	2009 年 7 月	C 園	中間管理職（担当あり）	42 歳	男性	18 年
G 先生	2009 年 7 月	C 園	保育士	25 歳	女性	5 年
H 先生	2009 年 7 月	C 園	中間管理職（担当あり）	41 歳	男性	10 年
I 先生	2009 年 7 月	C 園	児童指導員（担当あり）	25 歳	男性	4 年

本インタビュー分析手続きも、プレ・インタビュー分析手続きと同様、やまだ(2007)をもとに語りを3次テキストまで加工した。次に、3次テキストとして、意

味まとまりごとにカード化された逐語録を〈基本枠組み〉に基づき配置した。配置されたカードの中で、典型性、あるいは多様性を備えていると思われる語りを慎重に選択し、それぞれについて語りデータの検討を行った。

分析経過の結果を次に述べる。コロキウムにおいて、共同で語りデータを検討した結果、〈親—子ども〉、〈ケースワーカー—子ども〉、〈教師—子ども〉といった、子どもを取り巻くさまざまな支援基盤とのつながりを生み出すために、〈媒介者〉として働きかける児童養護施設職員の支援実践の様相が明らかになった。

コロキウムでは、さまざまなつながりに働きかける様相を、〈基本枠組み〉に基づき整理する段階までを行った。今後、修士論文作成過程においては、ここまでで得た知見に基づき、より現場の現実性に迫るモデルを構成していくことを目指した。

5. まとめにかえて

データを分析していく上で、自分の見方が適切かどうか迷うときがある。また、データについて他者からの意見をもらったがために、壁にあたることもある。質的研究に取り組む上で解釈の可能性や妥当性は大きな問題であり、特に若手研究者にとっては分析の方法を学べる場はあっても、実際に自分のデータを共有してもらい他者から意見を聞く機会は少ない。本コロキウムでは、この問題に取り組む一つの方法として分析のプロセスの検討を行った。自分のデータを共有してもらい、分析の方向性を考えたり、分析過程を見直すことで、この問題に取り組んできた。そして、分析の視点に迷ったとき、他者に新たな方向性を示してもらったり、行き止まりのように見えた方向を突破する方法を示してもらえ、共同でデータを見ることは有意義であった。

学会等での発表は研究について新たな知見が得られ、多様な視点からデータを見るのが可能となった。その一方で、データや分析のプロセスを十分に共有出来ないための限界が見られた。分析に至るまでの過程やデータ、分析の過程を十分に伝えられないため、他者の意見や質問に戸惑うこともあった。コロキウムでは、このような意見や質問をどのように受け止めるのかについて再検討することもあった。データの分析に取り組むだけでなく、開かれた場での意見をどのように受け取り、どのように分析すべきかを再検討する場としても機能していた。本コロキウムでは、データを共有する者だけで閉じた空間で検討し続けるのではなく、開かれた場で得られた意見を取り入れ、検討し、自分の研究の方向性に沿って分析を見直すというという過程をたどった。開かれた場での意見をうまく取り入れるため、開かれた場と閉じた場を往還しながら研究を進める一つの方法を示

せたといえよう。

時間的制限もあり，全ての参加者のデータを共有し，分析の過程を共有することは適わなかったが，共同でデータを見つめ，分析の過程を共有することの重要性が示された。また，閉じた場と開かれた場を往還しながら研究を進めることの意義も示された。今後は，閉じた場で行なう共同でのデータの見方，分析の進め方についてさらに検討することが必要であろう。

引用文献

- フリック.(2002). 質的研究入門—〈人間科学〉のための方法論(小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子,訳). 東京:春秋社. (Flick,U.(1995).Qualitative forschung. Humberg:Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH.)
- 川喜田二郎. (1967). 発想法-創造性開発のために. 東京:中央公論社.
- 谷口明子.(2006). 病院内学級における教育的援助のプロセス. 質的心理学研究 5, 6-26
- やまだようこ(編).(2007). 質的心理学の方法—語りをきく. 東京:新曜社.